

English Garden 第42話

"April is the cruelest month"

T.S. Eliot

「四月はいちばん残酷な月」

T.S.エリオット

今回は現代詩の中でも最も有名なものの一つである T.S.エリオット(1888-1964)の"The Waste Land"(荒地)です。「荒地」がエリオットの主宰する雑誌「クライティリオン」に発表されたのは1922年(大正11年)で、当時まだ第一次世界大戦(1914 - 1918)後の荒廃の中にあつたヨーロッパに大きな衝撃を与え、たちまち批評の中心となりました。この年は20世紀の巨匠 James Joyce(ジェームズ・ジョイス)が小説 "Ulysses"(ユリシーズ)を発表した年でもあり、英文学史上で大切な年とされています。

日本で広く知られるようになったのは終戦後のことですが、ちょうど同じような混乱と荒廃の状態にあつたことから、日本の文壇にも大きな影響を与えました。戦前この作品を読んだ評論家の荒正人氏は、「そのときは新しい試みとして受け取ったにすぎなかったが、敗戦直後に再び手にしたら、『荒地』のすべてが一瞬にして理解できたように思った」と述べています。この詩には引用などに関して作者の自注が多くつけられているなど、古今の作品からの引用も多く、最も難解な詩の一つとされています。

表題の言葉は、冒頭の部分です。いまではこれだけで一人歩きして、春になると新聞の記事の中などにも引用符なしでよく使われます。その先をもう少しご紹介しましょう。

April is the cruelest month, breeding
Lilacs out of the dead land, mixing
Memory and desire, stirring
Dull roots with spring rain.
Winter kept us warm, covering
Earth in forgetful snow, feeding
A little life with dried tubers.
四月はいちばん残酷な月
死んだ大地からライラックを育て
記憶と欲望を混ぜ合わせ
春の雨で鈍い根を掻き立てる。
冬は何でも忘れさせてくれる雪で地面を覆い
干からびた球根で小さい命を養いながら
わたしたちを暖かく保ってくれた。

四月は、チョーサーの「カンタベリー物語」では、万物が生を取り戻す恵みの雨をもたらすものですが、ここではパロディーとなって、精神的に甦らせることなく、記憶によって欲望を掻き立てるだけで終わっています。荒地のテーマがまずここで示されています。

この詩の巻頭には、エピソードとして次のような内容の神話の一節が使われています。

「クーマエで一人の巫女が籠(かめ)の中に吊るされているのを見た。子どもたちが『巫女さん、何がのぞみなのか』と聞くと、巫女は『わたしは死にたい』と答えた」

このクーマエの巫女は、アポロンに頼んでひと握りの砂粒の数と同じ年数だけ長生きさせてもらうのですが、永遠の若さを願うのを忘れたため、老いさらばえて、予言の能力も衰えたということです。この詩の内容を不気味に暗示しています。(次回に続く)

